

埼玉育ちのグローバル人

Well-being な生き方。～心健やかに、共に生きる～

第2回「化粧療法で救う在日外国人のココロ。」



埼玉県マスコット「コバトン」



Well-being Make 代表 尾崎のりこさん

みなさま、こんにちは！

埼玉県狭山市を中心に、日本語を母語としない方々のメンタルヘルスケア・社会活動支援を行っております、Well-being Make(ウェルビーイングメイク) 代表 尾崎のりこです。

それでは、早速前回の続きからです。

実は、私は添乗員を退職した後すぐに、メイクセラピーという“化粧療法”を学ぶ機会を得ました。添乗員という職種とは全く異なる分野ですので、私がメイクを習うとは思ってもよらず、自分自身でも驚きであり、また新鮮でした。

化粧療法とは、医療や福祉の場で活用されているセラピーの一つです。

お化粧や、お化粧前に行く傾聴により、受け手側の心のケアをする事、また、受け手の心に気付きや変化を促し、心を良い状態へと促していく事が、化粧療法の目的です。※

この化粧療法を学んだのち、私は、この技術をどう生かしたら良いのかと考えました。そして、

『女性がお化粧をしてキレイになりたいと思う気持ちは万国共通！メイクをキッカケとし、在日外国人の方が、気軽に集えるコミュニティーを作ろう！更には、その方々のメンタルケアに繋げよう！』という思いに至りました。

少し話が前後しますが、私が添乗員として働いていた時、エジプトカイロ国際空港のトイレの中で、女の子から“あなたが今手に持っているその口紅をちょうだい”と言われた事がありました。

まだあどけない小学生くらいの女の子が、お金でもなく、チョコレートでもなく、口紅を欲しがり、私に近づいてきたことが私の胸を打ち、口紅を手渡した時に溢れ出た少女の笑顔、嬉しそうに友達とほほ笑み合う光景が今でも忘れられません。あの時はまだ自分がメイクに携わる仕事に移るなんて考えもしていなかったのですが、今となって私が感じている事は、たった1本の口紅で、その人の世界を変えることが出来る、ということです。

唇に色をのせるだけで、生きる環境や境遇、世代など関係なく、女性は必ず笑顔になり鏡を見たいと心踊らせるということ。それだけ、お化粧品には心を動かすパワーがあるということです。

女性にとって、お化粧品は“生きる活力”になり得ると、私は信じています。

日本語を母語としない方々は文化や言葉の違いから、日本人の独特な“コミュニティー”に馴染みづらく、特に仕事を持たない女性は一人家で孤独を感じてしまい心が内に向いてしまいがちです。また、子供の語学力がどんどん成長していく一方で、自分の語学力が停滞しまう方や、日本語習得に行き詰まりを感じてしまう方はどんどんと家に引きこもってしまい、同じ母語の人としか交流を持たなくなってしまう方も多と思います。

そんな女性達の心のケアを、私はお化粧品を通じてサポートしていきたいと志しています。

病院へ行く前に、薬を飲むまえに、どうか私の元を訪れてくれますようにお願い活動しています。

それでは、次回は多文化コミュニティー作りについてお届け致します！お楽しみに^^

※化粧品療法の手法は複数ありますので、ここでご紹介する手法・目的のものだけとは限りません。